

# 古代オリエント時代とイスラーム時代の狭間

受け継がれなかった「古典」を中心に

春田 晴郎

東海大学文学部 助教授

## 0. はじめに

西アジアの研究を行なう者にとって、「古代オリエント」時代と「イスラーム」時代との断絶は大きなものに見える。「古代オリエント」研究者も「イスラーム」時代研究者も、お互いに全く異なる対象を研究しているがごとく、あまり交流も見られない。

なぜだろうか。

やはり、ハカーマニシュ（アカイメネス）朝、セレウコス朝、アルシャク朝（パルティア）、サーサーン朝と続くおよそ1200年間は、大きな影響を与えているように思える。これ以前（新バビロニア以前）とこれ以後（イスラーム時代）とでは、文化の様相があまりにも異なっている。各々の時代とも「古典」というべき作品を有しているが、両者に共通性はほとんどない。そして、「古代オリエント」と「イスラーム」を繋ぐべき1200年間は、「粘土板と紙との間の時代」であって、文字史料が著しく欠如している。

この間の西アジア文化の変動は、実際、大きなものであった。たとえば、粘土板・楔形文字・円筒印章・アッカド語などに代表されるいわゆる「古代メソポタミア文明」はこの時代に消え去っていく。もちろん、跡形もなく消滅したのではなく、後代の文化に甚大な影響を残しているが、たとえば「ギルガメシュ叙事詩」のコピーは行なわれなくなり、完全に忘れ去られてしまう。古代メソポタミア文明の「古典」は受け継がれなかったのである。

そして、それに変わる「古典」もほとんど現在には伝わってきていない。ハカーマニシュ朝からアルシャク朝にかけて、そのようなものは形成されたかもしれないが、結局後世には残らなかった。ようやくサーサーン朝期頃からゾロアスター教など各種の宗教関係の文献が後の時代にまで継承されるようになる。こうした古典史料の不連続を説明する理由の一つとして、各王朝の主要な行政用語が文字も含めて変化していったことが挙げられるであろう。ハカーマニシュ朝時代はアラム文字によるアラム語、セレウコス朝時代はギリシア文字ギリシア語、アルシャク朝時代は少なくとも後期ではパルティア文字パルティア語、サーサーン朝時代は中世ペルシア語、と皆

違うのである。

ここでは、以下、古代メソポタミア文明の終焉の様相を最初に論じ、ついでそれ以降の時代の文字作品継承について簡単に触れてみる。

## 1. 古代メソポタミア文明の終焉

楔形文字粘土板文書は、ヘレニズム時代以降、ウルク・バビロンを除いて消えていく。最後まで楔形文字文化が残るバビロンでも、神殿経済文書は前1世紀初頭まで、政治的出来事も含めて記される天文日誌（Astronomical Diaries）が前1世紀中頃までの文書しか残存していない。それ以降は、天体暦のみとなり、現在確認されている最後の楔形文字粘土板文書は、紀元後75年用の天体暦である<sup>(1)</sup>。

しかし、バビロンの楔形文字史料からは、古代メソポタミア文明末期の様相は、ほとんど窺えない。アルシャク朝時代でも前1世紀初め頃まで、「神殿」を中心とした伝統的な体制が残存していた。そしてそこでは「ギルガメシュ叙事詩」のコピーなどが行なわれている。貴重な歴史史料でもある天文日誌は、新バビロニア時代から記録されており、とくにハカーマニシュ朝後期からは形式もほとんど固定されていて、これ自体「古典」とみなすことができるかもしれない<sup>(2)</sup>。

天文日誌の記述から見る、彼らの「世界観」も非常に保守的なもので、古代メソポタミアの伝統的な地理用語をそのまま用いている場合がまま見られる。たとえば、前119年の天文日誌には、アルシャク朝の王（ミフルダート2世）の遠征相手として「グティ」が現われるが（No. -118A Rev.18<sup>ff.</sup>）、彼らは、実際にはサカと呼ばれる中央アジアのステップ遊牧民である<sup>(3)</sup>。

以上のように、現地史料からみられる、メソポタミア文明最末期におけるバビロンの姿は、それ以前のアケメネス朝・新バビロニア時代のそれと大きくは異ならず、伝統的体制が存続しているように見える。そして、その伝統の強さを強調している研究者も多い<sup>(4)</sup>。

では、文学作品のコピーといった「古典」も含めた、「伝統存続」の意義は何だろうか。そしてそのような体制はなぜ消滅したのであろうか。一つの仮説を提示して

みよう。

従来の説では、史料に表れる伝統の強さを強調するあまり、それがその後なぜ急速に消えていったのか十分に説明してこなかった。この現象を説明するためには、「伝統の存続」の内実を見極めることが必要となろう。

さて、改めて、この時代のバビロン出土楔形文字史料を概観してみると2つの特徴に気がつく。1つは天文関係の史料数の多さであり、もう1つは天文学者／占星術師の地位の高さである。

史料数の多さは、数理天文テキスト・非数理天文テキスト（天文日誌など）どちらにも言えることである。また結局天文テキストのみが残ることも、これと関連して考えられよう。天文テキストの史料数の多さはウルクにも共通する（ただし、こちらは数理天文テキスト中心<sup>5)</sup>）。

天文学者／占星術師の地位の高さは、例えば、紀元前127年のBOR4, 132というテキストからも窺える。このテキストは、神殿のuppudetu「監督官？」という地位にあった天文学者が、当時バビロンを支配していたペルシア湾頭のカラケーネという国の王の下に派遣され、そこで給与を得るようになったので、その後任として彼の子供達を任ずる、という内容である<sup>6)</sup>。

史料の種類は大きく異なるが、ストラボンやプリニウスの記述でも、アルサケス朝パルティア時代のバビロン・ウルクが天文学者中心のまちであるかのように記述されている<sup>7)</sup>。

当時のバビロン（およびウルク）で、天文学の研究というものが重要であり、天文学者が高い地位を占めていたことは疑いない。それはなぜだろうか。そして、このことから何が導き出せるか。天文学者を王の下に派遣していた、という記述を手がかりに、考えてみよう。

この時代のバビロニア天文学は、やや遅れて発達したギリシア天文学と同様、きわめて高い水準に到達していた<sup>8)</sup>。月食の予報ができるようになったことに代表されるように、天体暦の作成が可能になった。そこで、この地を支配した各王朝は、暦法の計算のために、天文学者を必要とし、保護・育成しようとしたのではないだろうか。そして、天文学者を再生産する体制として、従来通りの神殿体制にもあまり手を加えずにおいといたのではないだろうか。

楔形文字や円筒印章に代表される古代メソポタミア文明は、紀元前1千年紀半ばから衰亡に向かっていった。この原因としては、アルファベットを利用するアラム人の流入や、ペルシア人など新興勢力の台頭で西アジアの中心がメソポタミアとはいえなくなったこと、などが挙げられるだろう。こうした傾向は、ヘレニズム時代にはもっと加速されるはずであった。というより、バビロン・

ウルク以外では実際そうなり、楔形文字文化は消えていった。

しかし、これら両都市（ボルシッパなども含めることができそうであるが）は、支配権力側から、天文学の発展を要請され、そのため、これに付随して伝統的な体制が残され、伝統的な宗教儀礼が存続していったのではないだろうか。いわば、伝統が「残された」のである。そして、楔形文字教育と密接に結びついていた「ギルガメシュ叙事詩」など「古典」のコピーも、またメソポタミア文明最末期の時代にまで続けられた。

都市の機構はむしろ単純化し、一見宗教都市のようになる。この点も、伝統的体制が、変形されながらも「残された」と解釈すれば、説明が容易になる。

紀元前2世紀にヒッパルコスが現れるなどして、ギリシア系のヘレニズム天文学がバビロニア天文学を完全に凌駕し、おそらくそれが東方に伝わっていった頃に、バビロニア天文学の史料が姿を消すのは示唆的である。

## 2. ハカーマニシュ朝時代以降

現存するハカーマニシュ朝時代に新たに作成された文字史料の中で、「古典」に値しそうなものは、ダーラヤウウ（ダレイオス）1世のビーソトゥーン碑文であろう。600年以上のちのクシャーン朝カニシュカ王のラパータク碑文やサーサーン朝初期の王碑文との形式・表現等の類似性が指摘されている。口誦によって、あるいは当時の共通行政用語アラム語で記された同碑文のコピーを通じて、碑文の内容が伝わっていったのであろう<sup>9)</sup>。アラム語によるビーソトゥーン碑文のコピーは、上エジプトのエレファンティネ島から発見されている。サーサーン朝をハカーマニシュ朝の後継とみなす説の根拠が薄れつつある状況から見ると<sup>10)</sup>、アラム語コピーによる伝播とみたほうが良さそうである。

ギリシア語の地位が高まったセレウコス朝時代を経て、アルシャク朝時代になると、アラム文字の多様化がはつきりしてくる。南西イランのエリュマイス王国で用いられたアラム文字などは、ハカーマニシュ朝時代の字形とは相当に異なっており、同時代の他のアラム文字使用者がこの文字を読み取れたかどうか疑問である。また、訓読を利用した各言語の表記も確認できるようになる。アラム語の単語を他の言語で訓じる訓読はおそらく早い時代からあったのであろうが、アルシャク朝時代のバルティア語の表記は、もはやアラム語としては解釈できなくなる綴りが現われてくる<sup>11)</sup>。このような状況下では、作品を後代に残していくことはかなり困難であったに違いない。

サーサーン朝時代になると、伝統的なゾロアスター教

歴史観が確立していく。これは「古典」と呼んでも良いだろう。しかし、この歴史観は、ハカーマニシュ朝はほとんどなく（アレクサンドロスに征服される王を除く）、アレクサンドロスのあとにアルシャク朝が直結するなど（セレウコス朝がない）、現実の歴史とは大きく異なったものであった。

このようにして生じた断絶は、すでにイスラーム時代早い時期から認識されていた。イスラーム時代紀元1000年頃、ピールーニーは、アレクサンドロス以前の歴史に関する記述が、西方（地中海世界由来）と「王書」などイラン由来の伝説とであまりにも違っていることに気づいた。しかし、ピールーニーは、西方の、現在ではより史実に近いとわかっている王朝に関する記述の方を、イランの王とバビロニアの支配者とを混同したものであると、とみなしてしまうのである<sup>(12)</sup>。

注：

- (1) 史料状況については、J. Oelsner, *Materialien zur babylonischen Gesellschaft und Kultur in hellenistischen Zeit*, Budapest, 1986, 参照。最後の楔形文字文書については、A. Sachs, “The Latest Datable Cuneiform Tablets”. In: *Kramer Anniversary Volume. Cuneiform Studies in honor of S. N. Kramer*, Neukirchen/Vluyn, 1976, pp.379-398, 参照。“Graeco-Babylonica tablets”と呼ばれる文書について、ゲラーは最近の論文で、古いもので紀元前1世紀、新しいものは紀元後2世紀かそれ以降に作成されたのではないかと、という注目すべき説を提唱した（M. J. Geller, “The Last Wedge”, *Zeitschrift für Assyriologie*, 87, 1997, pp.43-95）。この説への批判として、春田晴郎, 「アルシャク朝パルティアの一次史料」『オリエント』第41巻第2号(1998), 192ページ注22参照。楔形文字研究者を中心にゲラー説への支持は少なくないが、(R. J. van der Spek, “Cuneiform Documents on Parthian History”. In: J. Wiesehöfer, ed., *Das Partherreich und seine Zeugnisse*, Stuttgart, 1998, pp. 206-7; C. Müller-Kessler & K. Kessler, “Spätbabylonische Gottheiten in spätantiken mandäischen Texten”, *Zeitschrift für Assyriologie*, 89, 1999, pp. 65-87), 筆者の見解は変わっていない。なお、ここでは楔形文字使用について述べているのであって、メソポタミア古来の神々への信仰がサーサーン朝初期中期にまで存続していた可能性まで否定するものではない。
- (2) Oelsner 前掲書；van der Spek 前掲論文。
- (3) 天文日誌については、春田前掲論文参照。テキス

トと英訳は、A. Sachs H. Hunger, *Astronomical Diaries and Related Texts from Babylonia*, Vols. 1-3, Wien 1988-96.

- (4) van der Spek 前掲論文。
- (5) Oelsner 前掲書, pp. 139-91, とくにpp. 180-6 参照。
- (6) 訳は、R. J. van der Spek, “The Babylonian Temple during the Macedonian and Parthian Domination”, *Bibliotheca Orientalis*, 42 (1985), にある。
- (7) Strabon, *Geography*, 16, 1, 6; Pliny, *Natural History*, 6, 121-123.
- (8) この時期のバビロニア天文学については、O. ノイゲバウアー（矢野道雄・斎藤潔訳）『古代の精密科学』恒星社厚生閣 1984, pp. 89-132がきわめて重要。
- (9) N. Sims-Williams & J. Cribb, “A New Bactrian Inscription of Kanishka the Great”, *Silk Road Art and Archaeology*, 4, 1995/96, pp. 82-3 参照。
- (10) M. Roaf, “Persepolitan Echoes in Sasanian Architecture”. In: Curtis, V. S. et al. (eds.), *The Art and Archaeology of Ancient Persia*, London, 1998 参照。
- (11) Seiro HARUTA, “Formation of Verbal Logograms (Aramaeograms) in Parthian”, *ORIENT*, Vol.28 (1992), pp.17-36 参照。
- (12) C. E. Sachau, tr., *The Chronology of Ancient Nations*, London, 1879 (repr. Frankfurt 1969) p.114 (p.110).